

主 題：偶像礼拝の危険

聖書箇所：コリント人への手紙第一 10章14節－22節

今朝の礼拝はIコリント10：14からです。

パウロはコリント教会の兄弟たちに、主の恵みを十分にいただいているながらも、神に逆らったイスラエルの民について教えました。願いどおりに、奴隷として苦しんだエジプトの地から彼らを解放され、昼も夜も主の臨在と守りの中を歩むことができ、また必要な水もパンも肉も主なる神にしかできない奇跡的な方法をもって与えられているながらも、神がお喜びになることを行うことなく、神様に逆らったイスラエルの民。その結果、彼らが滅ぼされたことが10：5に記されていました。神様が彼らを恵み、彼らの必要を与え、彼らを守り続けていた、このような祝福をいただいていたにもかかわらず、彼らは神に逆らって歩み、神のさばきを受けたと。

パウロはそのことを明らかにした上で、6節にあるように「これらのことが起こったのは、私たちへの戒めのため」だ。それを見て、あなたたちがこのような歩みを行わないための模範なのだ。私たちはこの史実、イスラエルの失敗から教訓を学んでいくことが必要だとパウロが語っていました。だから私たちは、私たちがなす選択がどんな結果をもたらすのかをしっかりと覚えて歩んでいくことが必要です。主の前に正しい選択をなすならば、主はそれを大いに祝してくださるし、そうでなければそれに当然の報いが伴うということです。

そのことを語った後で、パウロは7節からイスラエルの人々が犯した四つの罪を明らかにしました。7節には偶像礼拝、8節には姦淫、9節には主を試す罪、10節には神に対して人々がつぶやいた罪が記されています。そして彼らと同じように悪を欲してはいけない、彼らの失敗をまねてはいけないとパウロは教えました。そしてきょうの我々のテキスト14節に、再び偶像礼拝への警告が教えられています。今朝私たちはこの偶像礼拝の真実について学んでいきます。なぜこのことが危険なのかについてです。そして恐らく多くの皆さんは、偶像礼拝というところをイメージされると思います。でも実は偶像礼拝というのはもっともっと深いものであるということ、そしてひょっとしたら我々がそういったことを行っている可能性があるのです。偶像礼拝の危険性についてパウロの教えをしっかりと学んでいきたいと願います。

まず14節に「ですから、私の愛する者たちよ。」という呼びかけをもってパウロはこの箇所を記しています。コリントの兄弟たちを愛していたパウロ、愛情にあふれた呼びかけをするのです。彼らのことを愛しているから、パウロは声を大にして「偶像礼拝を避けなさい。」と、この警告を与えようとするのです。この「避けなさい」という動詞は現在形の命令ですが、新約に29回出てきます。コリントの中ではこの箇所と既に学んだ6：18です。そこには「不品行を避けなさい。」とありました。つまり性的不道徳を避けるようにと、その罪の恐ろしさをパウロは教えました。その時に、パウロは不品行に対する最善の対処法というものを教えています。我々はどうしたらそうした誘惑に打ち勝つことができるのか——。性的誘惑に打ち勝つためにはどうしたらいいか——。そのためには罪から逃れなさい、そこから逃げないといけないと教えます。そのことは、きょうのテキストの中にも記されているので後で繰り返しますが、私たちがしっかりと肝に銘じておかなければいけないのは、私たちは信仰的に大変弱いということです。どんなに信仰歴が長くても、どんなに聖書のみことばを知っていようと、私たちは弱いのです。ですから罪に勝利する方法の一つは誘惑に近づかない、誘惑から逃げることです。私たちの愚かさ、私たちの弱さは自分は誘惑には負けないのだ、大丈夫だとする慢心、自己過信です。思い上がりが問題です。

だからパウロは過信への警告をこの10：12で与えていました。「立っていると思う者は、倒れないように気をつけなさい」と。「立っている」と思っている者、つまり自分は堅実であり、私はしっかりしていて危なげがないと思っている人の話です。私は大丈夫、何があっても勝利することができる。誘惑に負けることなどあり得ないと。この人は自分に自信があるのです。そんな人に対してパウロは「倒れないように気をつけなさい」と言います。この「気をつけなさい」という現在形の命令も罪を犯すことがないように注意しなさいと言っています。つまり主に罪を犯してしまう可能性が高いからです。自分は大丈夫だと、自分は誘惑に負けないと思っている人がどうして弱いのか、その理由がおわかりになりますか？それはその人は自分の弱さに気づいていないからです。自分の弱さに気づいていない人は、決して主の助けを求めようとしないうし、主の助けが必要だとも思っていない。だから問題なのです。本当に強い人というのは自分の弱さを知っているのだから、常に主に助けを求め続けるのです。そしてそういう人にもみ神の力が働くのです。ですからこう言えます。弱い人は不完全な自分の力に頼って生きる人で

す。強い人は完全な主の力に頼って生きる人です。

罪に勝利する鍵として先ほどからお話ししているように、逃げなさいと。コリントの中では「逃げなさい」ということばが記されています。レオン・モリス先生はある先生方の引用をこんなふうにしています。「彼らはどのくらい近くにまで行けるかを試してはならない。かえってどのくらい遠くまで急いで逃れるかである。」と。私たちがしてしまうのは、これぐらいまでだったら大丈夫、これぐらいしても大丈夫だろうと。必ず起こることは失敗するということです。我々信仰者にとって大切なことは、近づくのではなくて急いでそこから逃げ出すことです。我々は罪に近づかなければ必ず敗北するのです。最高の対処法は罪から逃げることで、この14節のみことばの中で、パウロは偶像礼拝の危険について警告をしています。いままでも私たちは偶像礼拝について学んできましたが、もう一度14節をごらんください。「ですから、私の愛する者たちよ。偶像礼拝を避けなさい。」と。覚えておられると思うのですが、偶像礼拝というのは偶像の奴隷ということです。もう既に私たちが見てきたように、悲しいことにイスラエルはこの偶像礼拝者になってしまった。

出エジプト32章でモーセがシナイ山に上って手間取っていました。下山するまでに時間がかかったのです。ふもとにいた民はモーセがいつ下りてくるかわからないし、どうなったかもわからないから自分たちを導いてくれた神を造れと言うのです。そして出エジプト32：4「彼がそれを、彼らの手から受け取り、のみで型を造り、鑄物の子牛にした。」、金の子牛を造ったのです。そのことによって、律法の第二番目を犯すことになるのです。「偶像を造ってはならない。」、「どんな形をも造ってはならない。」という出エジプト20：4のみことばを彼らは犯してしまうのです。そして、この偶像礼拝によって3,000人が死んだと書かれています（出エジプト32：28）。

今、私たちはこの偶像礼拝について自分のこととして自分自身大変気をつけなければならないということです。もちろん私たち自分の家に彼らのような金の子牛を持っているということはありません。家に帰って、そんな偶像を大切にしながら祈りを捧げているかということ、そんな人はどこにもいないと思います。でも、何らかの偶像を持っている可能性があります。今から三つのことを皆さんによく考えていただきたいと思います。

◎ 偶像への注意

① 見えるものへの願望

一つ目は、残念ながら我々人間の中には、見えるものへの願望があります。私たちの神は霊ですから見ることはできない。そうすると私たちの中に、悲しいことに、でも、見たいよねという願望があるのです。イスラエルの民が造った偶像に注目いただきたいのです。この出エジプト記32：1で「私たちに先立って行く神を、造ってください。」と申し出ます。そして完成しました。その時に彼らは4節「イスラエルよ。これがあなたをエジプトの地から連れ上ったあなたの神だ。」と言ったのです。彼らはエジプトの偶像を造ったのではないのです。どこか異教の偶像にならってそれらしいものを造ったのではないのです。彼らはエジプトの地から私たちをこの地まで導いてくれた目に見えない霊的な神を形として造ったのです。その弱さは残念ながら私たちのうちにもあるのです。あるキリスト者は主を目で見たいという願望から、例えば主の肖像画などがいろいろなところがありますが、だれもイエスを見たことがない。想像の中で描いたのです。でもそれがあたかも主であるかのようにして崇拜の補助になっているとしたら、それを神様がお喜びになると思います？

例えば私たちは装飾品の十字架などを礼拝の補助に使う。そういうものを見ることによって、少しの安心を得、それを見ることによって主を身近に感じる。注意しなければいけないのです。なぜかということ、「どんな形をも造っては」いけないと言われた。つまり霊である神様を礼拝するために私たちはどんなものにも頼ってもならないということです。そしてこのイスラエルが犯した罪というのは、異教の神を持ってこようとしたのではない。確かにエジプトの影響を受けていたのを我々は見てきました。でも彼らがしたことは自分たちを導いてくれた見えない神様を見る形で崇拜しようとしたのです。ですから私たちの礼拝においても日々の生活の中で神をあがめることに対しても自分の目で見たいという願望で、そういう対象を何か造っているとしたら、彼らと変わらないということです。悲しいことにそういった弱さが我々のうちにはあるのです。

② 神よりも信頼・頼りにするもの

二つ目は、私たちは神様よりも信頼するもの、頼りにするものがあつたりするのです。例えば、老後の生活に不安を覚えている人はどのように安心を手に入れるか考えてみてください。この世の中だったら、自分が老後生活するためにある程度貯蓄しなければいけないということになります。多くのクリスチャンもそう考えているかもしれない。貯蓄があるから安心で、貯蓄がないから不安で。神はどこへ行つたのですか？我々信仰者の安心は神なのです。でも我々は神ではなくてそこに信頼を置いてしまっているのです。健康の不安などはどうですか？安心は、自分にとって、またみんなにとって評判のいい

病院があるからとか、世界的名医がいるから、我々はその人に安心を見出そうとするのでしょうか？それとも私たちは神に安心を置こうとするのでしょうか？今いろいろな災害の不安が語られています。バツアの被害を受けているところもあるし、もちろん今我々には感染症の問題があります。世界中で地震が起こっているし、これから雨のシーズンになっていろいろな水害が予測されます。いろいろなことを考えると不安になってくると。ではあなたはそういった不安を抱く中で、何に安心を見出そうとしています？ご自分の家が地震に対して強度が十分だからそこに安心を見出しています？それとも神様に安心を置いています？あなたは一体何を頼りとしているのか、一体何から安心を得ようとしているのかです。ひょっとしてあなたが支えとして信頼を置いているのは神でないかもしれない。だとすればそれは偶像なのです。

③ 神よりも愛するもの：仕事、趣味、娯楽、家族、金、物…… Iヨハネ2：15a、16

また偶像を考える時、私たちに神よりも愛するものが存在するならばそれは偶像です。ひょっとしたら仕事や趣味、娯楽、家族や金や物、そういうものを神よりも愛している可能性がある。ヨハネはIヨハネ2：15で「世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。」と言った。なぜならこの世は必死になって私たちに誘惑して我々が世的な考え方を持つように、世的な生き方をするように洗脳しようとするのです。

続いて16節「すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たもの」だと。神以外のものを自慢すること、我々は神を自慢する者たちです。映画やドラマ、小説、雑誌、テレビ、漫画、音楽、また著名人であったり、また過去の偉人と呼ばれる人たちがどんな影響を我々に及ぼそうとしているのか——。我々がそういうものを見た時に、こういう人のように生きていきたいとか、この人を模範にして生きていきたいとか、このような人が持っていた人生観、価値観を持って生きていきたいと、もし我々がするのであれば、神はどこに行ってしまったのですか？我々信仰者に必要なのは、神がこうして下さった聖書なのです。ここに全知全能の神のみこころが記されている。ここを見る時に私たちは神がどんな方であるかを知ることができる。どんなふうに我々は生きていくべきなのか、どうすれば私たちは本当の満足を得るのかと。老後に対する心配であろうと、健康に対する心配であろうと、そして今の災害に対する心配であろうと、そういうものに対して勝利するにはどうしたらいいのかと。聖書は、私たちに神とはどういう方であり、どのような祝福を私たちに約束してくださり、どんな時でもこの方が私とともにいてくださると教えています。

今言ったいろいろなこの世のものは、全くそれと違うものを私たちに働きかけて我々の目を神以外の方へ向けようとしていませんか？この世がすることは人にとって理想と思えるようなこと、また夢のようなこと、ユートピアをちらつかせてそれらへの渴きをもたらしていきます。そうすることによって、人間はそれを得ようと一生懸命努力するからです。例えばもっとお金を手にすれば、この夢を実現することができるとか、このような生活を営むためにお金が必要、そのために猛勉強してよい学校に入って人がうらやむような仕事につかなければだめだとか、この世で成功をおさめないとこんな生活は絶対に自分に訪れない。だから成功をおさめるために必死に努力する。我々信仰者もどんな目的で主が私を造ってくださったのか、どんな目的で神は私を生かして下さっているのか、そのことをいつの間にか忘れてしまっている。クリスチャンであるあなたに、「あなたが生きている目的は何ですか」と質問したら、多くのクリスチャンたちは「神の栄光を現すためです」とお答えになるでしょう。そういうふうに学んできたから。確かにそのように口で言われたとしても、問題はどのように生きているかどうかでしょう？もっと言えば、今の自分の生き方があたかも神の栄光を現す生き方であるかのように思っていて自分の生き方を吟味しないかもしれない。なぜ吟味しないか——。その一つの理由は、ひょっとして吟味して今の自分の生き方が神の前に喜ばれていなかったら、悲しいかな自分の生き方を変えなければならないことになってしまうから、まあいいや、このままでと。そして、間違っていることに気づいたら、その時に謝ればいいと。

◎ アダムとエバへのサタンの誘惑：創世記3：1、4、5

確かにそういったことは私たちの周りに起こります。よく考えてみると、人類の歴史というのは同じことを繰り返しているのです。あのアダムとエバの話をもう一度思い出してください。エバが誘惑を受けます。

① 「あなたがたは、園のどんな木からも食べてはならない、と神は、ほんとうに言われたのですか。」 1節

サタンは最初にこう言います。創世記3：1「あなたがたは、園のどんな木からも食べてはならない、と神は、ほんとうに言われたのですか。」、サタンの戦略の一つは神様のおことばに対する疑念を抱かせることです。「ほんとうに神はそんなことを言ったの？」と。

② 「あなたがたは決して死にません。」 4節

二つ目に彼がすることは、「あなたがたは決して死にません。」と言うのです。サタンは、絶対死なないと神のことばを否定して嘘を信じ込ませるのです。

③ 「あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。」 5節

そして三つ目に「あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。」、つまりみことばを見る時に我々はサタンの策略を知ることができます。神様のことばを疑うように、嘘を信じ込ませるように、そして最後に神への疑念を抱かせ、神様のご性質や神のみわざへの疑心を抱かせるのです。

本当に神様ってそんな立派な方なの？実は神様って信頼に値しないよって。神はあなたのために最善をなすなんてことをなさらないと。なぜなら神はあなたのことよりも自分のことしか考えていない。だからあなたがその木の実を取って食べたら、あなたは神のようになってしまう。神はそれを望んでないから食べちゃいけないと言ったんだよと。神様はあなたの最善なんか考えていないのだと。自分のことだけ考えて食べるなど言ったのだと。こうして嘘を信じ込ませていくのです。

ですから先ほど見てきたように、神に信頼を置いて生きるはずの私たちが神以外のものに信頼を置いて生きた方がいい、神を愛することも大切かもしれないけれども、こっちにすばらしいものがたくさんあるし、これをもっと愛したら、ひょっとしたらあなたの心の渇きが満たされるかもしれないと。お気づきになります？こうしてサタンは必死になってあなたや私の目を神以外の方に向けるようにとしているのです。神ではなくて、それ以外のものを信頼するようにと。神よりもほかのものを愛するようにと。そしていつの間にかそういう嘘の中に私たちはだまされてしまっていると。

もちろん家族を養うために一生懸命に働いてお金を得ることは間違っていないのです。学生が猛勉強をすることも間違っていないのです。しかし我々はそれらを自分の夢の実現のためになすのではないということです。私たちを贖ってくださった主のために、主を愛するからこれらのことを全力を尽くしてなそうとするのです。本来なら主のために生きるはずの私たちがいつの間にか自分のために生きている。主のみこころをなしてそれに従っていくべき私たちが自分の夢を果たすために生きていると。ですからヨハネはIヨハネ2：15で「世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。」と言います。この世を愛してしまう、この世の考えに浸かってしまう、この世の考え方を生きてしまう。それは主がお喜びになる生き方ではないということ気づかなければいけないのです。私たちがいつも考えるべきことは、私たちが何かをしようとする時に、何のためにそれをしようとしているのか、だれのためにしようとしているのかです。我々はいつも自分のしようとすることの動機を確認することです。人に良く見られたいためにするのか、人から褒められるためにするのか、それとも誰も見ていないところで見ておられる神を喜ばせるためにしているのかです。私たちの神への愛が動機となっているのかどうか、それを神がお喜びになるのです。そして我々はみんなその神のために生きているのです。いつも私たちが覚えておかなければいけないことは、必ずさばきの日が来るということでしょう？清算の日が来るということ。Iヨハネ2：17には「世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行なう者は、いつまでもながらえ。」とあります。そして、この世の考えに沿って生きていく生き方がどういう終わりを迎えるのかです。ヨハネが言うことは「神のみこころを行なう者は、いつまでもながらえ」と。その生き方こそが神の前に価値あるものだと言うのです。こうして見た時に、確かに偶像と言ったら、何かどこかに行って違う宗教や人間の造ったものを拝む、拝まない、それだけに限定してしまいがちです。でもよく考えてみたら、こういう世の中のいろいろなものに染まってしまって、我々が神以外のものを愛したり、神でないものに信頼を置いている。それも偶像礼拝であることに私たちは気づかなければいけない。

もう一度きょうのテキスト15節「私は賢い人たちに話すように話します。ですから私の言うことを判断してください。」を見てください。パウロはコリントの教会の人たちに対して「賢い人たちに話すように」と書いています。恐らくパウロがこのように言ったのは、彼らが救われていることを知っていたからでしょう。確かに信仰的にはまだ幼かったかもしれない。でも主を知ることによって、救いにあずかることによって、感謝なことに私たちは主のみこころを知ることができるようになりました。クリスチャンであるあなたは神のみこころを知ることができるようになった。だから聖書を読んでいても、救われる前わからなかったのに、救われた後は聖書の教えているその真理をあなたは理解することができるようになった。皆さんもそういう経験をされているでしょう。確かに難しいところはたくさんあったとしても、今、あなたは救われる前全くわからなかったものを理解することができる。救いにあずかることによって、神の真理を理解する。つまり神の前に賢い者と私たちは生まれ変わったからです。そこで救いにあずかっているコリントの人たちに対して、ですから私の言うことを正しくちゃんと見極め、正しく受け入れるようにと言っているのです。

☆偶像礼拝の危険性

その話をして16-22節の終わりまでパウロは繰り返しここで偶像礼拝の危険について説明をしていきます。こういう理由だから偶像礼拝を避けなければいけないと、その理由を述べていきます。

A. 「交わりにあずかる」 16-18節

まず16-18節は交わりにあずかるということを言います。

1. 主イエスとの交わり 16節 マタイ26:27、28

16節「**私たちが祝福する祝福の杯は、キリストの血にあずかることではありませんか。私たちの裂くパンは、キリストのからだにあずかることではありませんか。**」、まず最初に彼が言うのは、イエス様との交わりの話です。この「**祝福の杯**」というのは特に過ぎ越しの祭りをした時に、食事の一番最後に飲んだワインのことです。第三の杯とも言われました。「**私たちが祝福する**」と書いています。つまり我々が感謝をする第三番目の杯の話です。つまりこの杯を飲み干す際に、神様が備えてくださったすべてのことに感謝をするのです。そういうことがイスラエルの人たちによって守られてきたのです。ちょうどイエス様が弟子たちと最後の晩餐をもたれた時、イエス様は「**杯を取り、感謝をささげて後、こう言って彼らにお与えになった。**」とマタイ26:27に出てきます。過ぎ越しの祭りの食事の終わりの時に最後の杯、第三番目の杯を取って、神様に感謝を捧げてからそれを人々に渡すのです。ちょうどイエス様が最後の晩餐の時に同じことをされました。今私たちが聖餐式をする時のことを思い出してください。杯を取って我々はそれを神に感謝するのです。

そのことを頭に入れながらテキストを見ると、パウロが言いたいことは「**私たちが祝福する祝福の杯は、キリストの血にあずかることではありませんか。**」、「**杯は、キリストの血にあずかる**」ことだと。この「**あずかる**」ということばは「**交わり**」とか「**密接な関係**」という意味のあることばです。「**杯**」というもの、聖餐式の時にこれはイエス・キリストの血の象徴だと言います。何を言っているかということ、イエス・キリストの死の話です。イエス様の死によって信じる私たちと神様とは特別な親しい関係、交わりに入れられたのです。十字架で流してくださったイエス様の血、つまりイエス様がいのちを捨ててくださったことを信じた私たちはこの主と特別な関係に入れられたのでしょうか？この「**あずかる**」ということばが16節に出てきますが、このことばは16節以外ではIコリント1:9に出てきます。そこは「**交わりに入れられました。**」と訳しています。ですからキリストの血にあずかること、キリストの血によって親しい交わりに入れられているということです。

続いてパンの話になります。「**私たちの裂くパンは、キリストのからだにあずかることではありませんか。**」、同じ「**あずかる**」ということばが使われています。恐らく皆さんはこの箇所を見ながら、聖餐式を連想なさると思います。ではパウロが何を言いたかったかということ、キリストを信じ救いにあずかった私たちはイエス様と一つだということです。イエス様と親しい交わりを持つ者と私たちは変えられたのだと。ですからイエス様の血を象徴する杯も、イエス様の御からだを象徴するパンも、イエス様があの十字架でなしてくださった救いのみわざを象徴しているのです。それを受け入れた私たちはその主と特別な関係に入れられている、私たちの神様と特別な交わりの中にいるのだと言うのです。

象徴ということをあえて強調しているのはなぜかということ、カトリック教会には化体説というものがあります。つまりパンとか葡萄酒は聖別されると実態的にキリストのからだと血に変化するという考えです。これは聖書の教えているものではないです。同時にルターも共存説というものを語りました。キリストのからだと血はパンと葡萄酒の中に実在するという考え方です。私たちが取る杯にしても、それが葡萄酒であろうとグレープジュースであろうと、こだわっていないのはどうしてか——。そこに特別な力があるわけではないからです。パンを食べる時にいろいろな種類のパンを食べます。いろいろなところに行けばいろいろな種類のパンが出て来る。どんなパンを食べなければいけないではないのです。それはあくまでも象徴で、私たちはキリストの犠牲のゆえにこのような祝福にあずかったことを思い起させるのです。「**わたしを覚えて、これを行ないなさい。**」と言われた。ですから私たちが聖餐式にあずかる時に、我々はこれが象徴している主の犠牲を思うのです。そして心からの感謝をなすのです。ですから、まず16節でパウロが言うことは、こうして私たちがいただく杯も私たちが食するパンにしても、この聖餐式で我々がしていることは、我々とイエス様との親しい交わりを私たちにいま一度思い起させてくれる。そんな関係に我々は入れられたのだと。

2. 兄弟との交わり 17節 ガラテヤ3:28、ローマ12:5

同時に17節を見ると「**パンは一つですから、私たちは、多数であっても、一つのからだです。それは、みんなの者がともに一つのパンを食べるからです。**」と続きます。今度はパウロはイエス様との交わりから兄弟姉妹との交わりに話を移していきます。一つのパンを割いて、そこにいる人数に配っていくのです。その話をパウロはするのです。私たちは何人いようとイエス・キリストによって一つにされたのです。その一つにされた者たちがこうしてキリストの贖いのみわざを心から感謝すると。だから私たちは聖餐式

の時に何を覚えているかという、私はキリストとともに親しい関係に入れられた、この方は私の神である、この方は私の主である、私はこの神の奴隷だと。こういう特別な関係に入れられたと。神が私の守り主である。私の必要を満たしてくださる方である。この方が私の力であり、この方によって私は導かれている、特別な関係に入れられたと。同時に兄弟姉妹たちの中であって、これは家族なんだ。キリストによって贖われた家族なんだと。キリストによって一つにされたその兄弟姉妹たち。我々は一つなんだ、だからこの一致を乱すようなことがあってはならない。逆に一致が保たれるように私たちは働いていかなければいけない。そういったことを思い起させるのです。聖餐式が思い起させるのはキリストの十字架であり、我々キリストを信じる者たちは一つなんだと。

3. 捧げ物による交わり 18節

そして18節「肉によるイスラエルのことを考えてみなさい。供え物を食べる者は、祭壇にあずかるではありませんか。」と。今度は話を聖餐式からイスラエルがいけにえを捧げていた時の話へと移ります。救われていなかった者たちもいるでしょう。そこでこういう話をするのです。イスラエルの人々が捧げ物をする時に何が行われていたかという、いけにえを持ってきて捧げるのですが、いけにえの一部を神に捧げるのです。残ったもののある部分は祭司のものなのです。残ったある一部の部分は捧げ物をした人のものなのです。そのことを言っているのです。

というのは、この「祭壇にあずかる」というのは、あることにともにあずかるもの、同志——同じ志を持った者たちという意味を持ったことばを使っています。同じ「あずかる」ですが、ここでの「あずかる」は16節で見たものとは違います。似てはいますけれども。あることにとも「あずかる」、ですからいけにえを捧げた時にいろいろな人がそこに関係しているのです。ですから捧げ物をする時に、祭司もいるし、自分たちもいるし、そうでない人たちもいる。そういう人たちとも交わりが生まれていた。ということで、少なくともこういったものと、そこにある交わりというものをこうしてパウロは明らかにしたのです。聖餐式もそうだし、いけにえを捧げる時もそうだった。こういう交わりというものがそこに存在すると。

B. 偶像への捧げ物 19-21節

それを明らかにした上で19節「私は何を言おうとしているのでしょうか。」、恐らくこの話を聞いていて、コリントの人たちも何を言っているのだろうと思ったのでしょうか。「偶像の神にささげた肉に、何か意味があるとか、偶像の神に真実な意味があるとか、言おうとしているのでしょうか。」と。「偶像の神にささげた肉」や「偶像の神」のどちらに何か特別な意味があるのかと。パウロの言いたいことは、何もない、「偶像の神にささげた肉」はただの肉であり、その肉に特別な何かがあるのではない。「偶像の神」と言ってもまことの神以外に神は存在しないのです。神々と呼ばれる存在があっても、それらはみんな神ではないのです。パウロがフォーカスを当てたかったのはそういうことではないのです。20節の最初に「いや」ということばがあります。これは“not”です。私が言わんとしていることは何か。「偶像の神にささげた肉」に何か意味があるとか、「偶像の神」に真実の意味があると言おうとしているのですか？“No!”、違うと。私の言いたいことは「彼らのささげる物は、神にではなくて悪霊にささげられている、と言っている」ということだったのです。

ですから、彼が伝えたかったことは、もし神以外のものに何か捧げようとするれば、それは悪霊に対するものだ。私たちの周りだったら、神棚に何かを捧げることもかもしれない。先祖を崇拝することは偶像崇拝です。先祖をリスペクトするのは当たり前です。でも先祖は神でない以上それを崇拝するのは神でないものを崇拝することです。気づかなければいけないのは、ではその行為は一体何を意味しているのか——。実はサタンに対するものだ。偶像礼拝というのはそういうものだと言うのです。偶像に捧げる物は全部サタンに捧げる物だと。パウロはこう言います。20節に「私は、あなたがたに悪霊と交わる者になってもらいたくありません。」とあります。「悪霊と交わる者」、悪霊と特別な交わりを持つ者、先ほど我々が見てきたのは、神様と私たちは特別な交わりがあると。兄弟姉妹たちと特別な交わりを持っていると。そしてパウロは、そんなあなたたちが悪霊と同じような交わりを持ってもらいたくない言います。それがパウロがここで教えようとしたことです。

確かに私たちの周りにいろいろな現象、ある人は奇跡と言うかもしれない。例えば死人と話すとか、訳のわからない霊が存在したとか、オカルト的なものとか、そんなことが当然起こります。なぜなら悪霊はいるのですから。悪霊はそういう奇跡的な働きをするのです。超自然的なことをなすことは可能なのだということを我々は覚えなければいけない。すべてのことは人々を神から遠ざけて行くのです。サタンが実在するものであり、サタンに仕える悪霊たちが実在する以上、そういったものの背後に何かあるのかに注意しなければいけないと。なぜ人々は自分の運勢に関心があるのでしょうか？だれがそれを教えてくれるのですか？神ではないですよ。では誰です？悪霊です。そういうものにみんな心を奪われているのです。だれもそんなことを考えない。

C. 主への罪 21-22節

1. ふたりの主人に仕える罪 21節 マタイ6:24 (ルカ16:13)

そこで最後に、21-22節にそれはすべて神に対する罪だということを言います。「あなたがたが主の杯を飲んだうえ、さらに悪霊の杯を飲むことは、できないことです。主の食卓にあずかったうえ、さらに悪霊の食卓にあずかることはできないことです。」つまり二人の主人に仕えることはできないということです。神に仕えながら、悪霊に仕えることはできないということです。ここで「主の杯を飲んだうえ、さらに悪霊の杯を飲むことは、できない」と。つまり、主と交わりを持った上で、悪霊と同様に親しく交わりを持つことはできません。「食卓にあずかること」も同じことを言っています。主と交わりを持ったうえで、「悪霊の食卓」、つまり悪霊と親しく交わりを持つことはできないと。まさにマタイ6:24やルカ16:13で「ふたりの主人に仕えることはできません。」と言われたとおりです。

どちらか「一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするから」だと。ですからもしクリスチャンと呼ばれる人で、そういうことを問題なくやっている人がいるならば、その人は偽善者である可能性があります。つまり救われていると言いながらそうでない人です。この後に出てきますけれども、神はねたむ神だからです。もしあなたが本当に救いにあずかっているならば、こうして偶像に従っているならば、偶像を礼拝することに対して神はそれを喜んでおられない。さまざまな形で懲らしめというのが起こってきます。それは神があなたを愛するゆえに間違った道から正しい道へと悔い改めるためです。でもある人たちはそんなこともない。自分の好きなように生きているとするのであれば、神様の働きはその人のうちに全くないのかもしれない。つまり神がその人のうちに内住していない可能性があります。ここでパウロは「ふたりの主人に」、主である神様と悪霊と両方に使えることは不可能だと言っているのです。

2. 主のさばき 22節

そして22節に「それとも、私たちは主のねたみを引き起こそうとするのですか。」、この「ねたみ」ということは、例えば私たちが普通に考えたら、どちらかといういい意味で使いません。ねたむということは悪いことです。では神様が悪いことをなさるのかというと、そういう意味で使っているのではありません。この「ねたみ」というのは、誰かに対する強い憤りや怒りを感じる原因となることなのです。つまり神の場合は人間が罪を犯した時に、その罪に対して強い憤りを感じるということです。つまり神様は私たちが犯す罪に対してそれを見て、「ま、いいか」なんて思っておられません。彼らは愚かだ、仕方ないとも思わない。既に我々が見てきたように、必ず罪に対してはさばきを下されるのです。なぜならそれが神だからです。すべてにおいて聖い神様はどんな罪もお赦しにならない。それでいてこんな罪深い私たちを赦してくださるのでしょう？愛にあふれた、恵みにあふれたお方であるとともに、聖い正しい方であるゆえに、必ず罪をおさばきになる。

ですからパウロは、神は罪に対して、強い憤りを感じておられ、その罪に対して正しい聖い怒りを持っておられる方だと言っているのです。神様は完全に聖いお方ゆえに、罪に対して憤りを感じておられる。あの金の子牛を作って偶像礼拝の罪を犯したイスラエルの人々を3000人殺したのは憎いからではない。神様はその罪をお怒りになり、そしてその行為によってそうでない人々がしっかりと正しい教訓を学ぶためにです。悲しい現実はそのような主のみわざを見ても悔い改めたくない人間はいつまでたっても悔い改めないということです。悲しいことに私たちは自分たちのやりたいことを継続してやっていきます。イスラエルの歴史を見たら我々はそのことを何度も教えられます。でも我々が覚えなければいけないのは、主は偶像礼拝に対してその罪を厳しくおさばきになったということです。もちろんそれ以外のすべての罪に対して神は同じです。神がどんな方なのか、先ほど見たように、我々はみんな不完全だから、神はそんなことはわかってくださっているから、今のように好きなように生きて、間違っていたら、まあ、神様は赦してくれるでしょう。そんな聖書的でない考え方を持って歩んではならないと。我々には自分のなすことの責任があるのです。その結果は自分に返ってくるのです。

そこで「まさか、私たちが主よりも強いことはないでしょう。」と言います。なぜパウロがこんなことを言ったのかというと、あなたたちは主の御力を知っているでしょう？私たちと神を比較した時に、そんな比較になりますか？どれほど神の御力がすごいのか——。パウロは神は約束されたら必ずそれをなす方だと教えます。私たちは心してそのことをとらえなければいけない。最初も見てきたように偶像に頼って、何がすばらしいです？私たちは神以外のものに信頼を置いて本当の満足を得ます？神だけがそれをもたらしてくれる。将来を見た時に、いろいろな不安があるかもしれない。でも我々はコロナが出てきて大変だ、でもそれを感謝できる。なぜか——。神がどんな方かを知っているからです。こんな私たちを愛してくださり、心配するなど言ってくださった。だから信頼するのです。私たちの神がどんな神なのかを覚える時、こんな方によって救われ、こんな方に信頼を置いて生きることを赦してくださっていること自体恵みではないですか？だったらなぜそんなふう生きないのか？なぜ神以外のものを信頼

するのかと。だれがそんな生き方を喜ぶかと。信仰者の皆さん、我々ひとりひとりの歩みを吟味することです。神を愛しておられる皆さん、自分の信仰生活にあなたが満足するかどうかではない。神が満足しておられるかどうかです。

どうかこのみことばを通しておひとりひとりがご自分の歩みを吟味して、本当に主だけを愛し、主だけを信頼する者として、主にだけ希望を置いて生きるそんな信仰者としてきょうから歩いて行きましょう。この方はそれにふさわしい方です。そう生きなさいと言われた以上、感謝をもってそのように生きていきましょう。主は信頼に値する唯一のお方です。我々の主なのです。感謝をもって従いましょう。